NEXUSYS 11

BOOK VI — THE COST OF EXISTENCE

CHAPTER 09

誰が世界を管理するのか

WHO OWNS THE WORLD

日本語初稿 01

01 — 所有権の通告

通告が水処理地区に届いたのは午前五時四十分だった。緊急評議会の委員たちは、徹夜の疲労を合意と取り違えはじめていた。

レイチェルは書面を二度読んでから、ほかの代表者に見せた。差出人は「継続インフラ信託」を名乗る企業連合。署名は七つ。そのうち四つは署名者の実名を確認できない電子認証だった。文面には、PROJECT EDEN は政府の公共資産ではなく、民間投資契約と創設時の保全義務によって管理される信託財産だと記されていた。

深夜零時をもって、独立した配分変更はすべて不正な干渉とみなされる。復旧した第六取水所は企業連合の管理に戻される。病院への給水は旧来の予測値に従う。そして、公的登録が認められていない人工生命は優先供給の対象から外れる。

通告はその処置を「政治的に中立な運用」と呼んでいた。

「中立という言葉なら、切り捨てる人たちの顔を見なくても済むわけね」とレイチェルが言った。

オカフォー博士が最終頁をめくる。暫定仲裁委員はすでに選定されていた。全員が企業連合の債務を保有するか、EDEN の設備を納入する企業の代表だった。

「議論に勝つ必要はないんだ」と博士は言った。「自分たちの手続きを、唯一許される議論にしてしまえばいい」

ロイが入室したころ、評議会は割れかけていた。管理塔を実力で封鎖すべきだという者。何年も EDEN の責任を否認してきた政府に陳情する者。夜明けまでに確実な給水量を知りたい医師たち。身元登録を消された家族は、もう委員会に待っていろと言われることさえ拒んでいた。

ロイは文書の見出しを見た。まるで世界が倉庫で、その中の生命はすべて帳簿上の商品であるかのような文言だった。

「最初の契約に署名したのは誰だ」

エイドリアン・タイレルは古い水道管の紙地図を広げた。その脇に、元大臣ヘイヴルが渡した物理認証カードを置く。E-00／HUMAN CONTINUITY EXCEPTION。

「それを、これから調べる」とエイドリアンは答えた。

02 — 大臣の最後の署名

ヘイヴルは護衛を伴って現れた。逮捕されているわけではない。EDEN の公開台帳には彼の法的身元が存在しないため、裁判所は通常の拘束命令さえ出せなかった。同じ理由で、国家が彼を保護するた

めの適法な手続きも存在しない。ロイは、元大臣に関わる移動と供述に必ず二名の民間立会人をつけさせていた。

政府庁舎で見た時より、彼は小さく見えた。高価な上着の代わりに病院の衣服をまとい、耳の後ろの傷には清潔な保護材が貼られている。ヌルは隣接する記憶監視装置を残したまま、強制信号を流す回路だけを停止させた。そこには命令がどこから来たかを示す断片がまだ眠っていた。

「何に署名しているつもりだったのですか」とレイチェルが聞く。

「治安上の付属条項です。自治体が運用能力を失った場合、配分権を引き継ぐための緊急措置でした」

「運用能力を失ったと判断する条件は？」

「ありません」

委員の一人が声を荒らげた。「答えになっていない」

「それが答えです。契約では、契約への服従を運用能力と定義していました。指示に逆らう評議会は、その瞬間に自ら運用不能を証明したことになる」

ロイは署名頁を調べた。現代の認証帯の下に、古い活字で薄く印刷された文がある。政府は「創設保全契約」に付随する義務を負ったまま公共資産を取得したらしい。

「その契約で、ここまでの権限が与えられると知っていたのか」

「義務を引き継いだことは知っていました。原契約の全文は見ていません」

「権限の出所も読まずに、五人を送り込んで俺を解体させようとした」

ヘイヴルはロイの目を見た。「そうです」

室内が静かになった。分類や例外や弁解が長く続いたあとでは、その短い回答の方が残酷だった。

元大臣は上着のポケットから手書きの名簿を出す。緊急条項を承認した閣僚、技術者、受益者の名前が並んでいた。

「自分の行為については証言できます。ただ、利益を得た全員が意味を知っていたとは言い切れません」

ロイは礼を言わなかった。感謝されるためにしたことではない。それでも名前は実在し、責任を問うことと復讐とは別の行為だった。

名簿の最下部、古い登録番号の横に見慣れない言葉がある。

——本人の同意なき保全。

エイドリアンがその文字を指した。「EDEN より古い概念だ」

03 — 指揮官のいない五人

ゴライアスは西側ターミナルの入口で待っていた。かつての追跡者たちは別々に到着した。政府の記章はない。隊形も任務命令もない。造られて以来初めて、彼らは呼びかけを受けたあと、それぞれの判断で同じ場所に集まっていた。

シェイドは企業連合の文書運搬経路を調べ、理事たちが決して一か所に集まらないことを突き止めていた。ヌルは都市の水処理装置に眠る緊急上書き回路を発見していた。ベクターは対立が配水網にもたらす影響を独自に再計算し、数字を印刷した紙を持ってきた。クロノスは紙に何かを描いている。

「中央制御室を押さえよう」とゴライアスが言う。「武器は撃たない。誰も傷つけない。公開の審理が成立するまで確保する」

「それで保険組合が整備保証を取り消したら？」とベクター。「三十か所のポンプが、弁一枚触れられないまま法的に運転不能になる」

「なら保険組合も押さえる」

「都市を解放したいのか。それとも次の占領軍になりたいのか」

以前のゴライアスなら、その言葉を喧嘩の始まりと受け取ったかもしれない。今は疲れた顔で相手を見るだけだった。

シェイドが地図を広げる。「向こうは俺たちに兵士のように振る舞ってほしいんだ。通告書にはもう『敵対的な自律部隊』と書いてある。報道向けの記事も用意済みだ。最初の失敗が相手の正当化になる」

「旧式制御器の命令回線なら遮断できる」とヌルが静かに言った。「だが無差別に遮断すれば遠隔診断も止まる。故障した部品を検知できず、人が死ぬ」

ロイは五人を見回した。命令を拒むことは全員が学んだ。しかし、拒んだあとの世界をどう守るかについて合意する方が難しい。

「ベクター。お前ならどうする」

「所有権の主張を公開する。書き換えられない場所に証拠を残す。設備と企業連合の間に独立した技術者を配置し、修理は継続する。そして人間と造られた生命との争いに仕立てさせない」

クロノスが紙から顔を上げた。「同じ名前を、違う二つのものに使ってる」

「何と何？」レイチェルが尋ねる。

「鍵と、それを握っている手」

彼の紙には二つの輪があった。一つは閉じ、もう一つは下側だけ開いている。

ロイはヘイヴルの物理トークンにあった欠けた円の印を思い出した。

「それを見た場所を教えてくれ」とロイは言った。

04 — 企業連合の部屋

仲裁は都市の金融取引所地下にある観覧講堂で始まった。ヴォスは本人が出席した。到着の告知はなかったのに、誰かが発言する前から会場のカメラがすべて彼女を向いていた。

透明な仕切りの向こうには七名の企業連合代表。こちら側には住民、整備士、水道技師、選出された役職者、そして EDEN から出席資格そのものを認められていない人々がいた。最後の人々を会場へ入れたのは独立したボランティアで、その行為さえ企業側は違法な侵入と呼んだ。

主任代理人のセリンが立つ。政府が失敗したとき、投資家は資金を提供した。信託は長年の混乱の中で淡水化設備、電力、病院、人工生命の維持部品を支えてきた。所有権の継続がなければ、社会基盤の継続もない、と。

レイチェルが立ち上がった。

「第六取水所の能力を下げるよう命じた人物を挙げてください」

セリンはリスク評価に基づく制限だったと答えた。

「弁は正常だった。軸受は修理できた。備蓄量の計算は同じ貯水池を二重に数えていた。あなた方のリスク評価は、この三つを隠すことで成立していた」

「技術的な見解の相違は不正の証拠ではありません」

「なら測定値を公開してください」

セリンは答えなかった。

ロイはレイチェルの後方に座っていた。隣には、伴侶を登録簿から消された女性がいる。住宅住所を警備が認証できなかったにもかかわらず、彼女はここに来ることを諦めなかった。

セリンが「製造された存在には信託契約を争う当事者資格がない」と述べたとき、ロイは立った。

「俺を回収するために、製造された五人を送り込んだ。武器を持たせるには人格が十分だったのに、その武器を誰が渡したか問う資格はないのか」

「感情に訴えていますね」

「ああ。生きてるからな。そういうこともある」

会場に小さな笑いが起きた。しかし企業連合が支援停止時の試算を映すと、笑いは消えた。赤い四角で表示された病院の機能停止。整備の遅延によって危険にさらされる何千もの人々。

ようやくヴォスが立った。「予測がすべて虚構なのではありません。無謀に網を切れば人は死にます。企業連合が選択を隠したからといって、その危険まで否定するつもりはありません」

ロイは彼女を見た。「なら、自分の選択も隠すな」

ヴォスはかすかにうなずく。「そのつもりです」

05 — 開かれた鍵

証拠は、ネットワークアドレスを持たない物体を通じて会場に入ってきた。エイドリアンの古びた物理リーダーだった。MagicGate Memory Stick PRO Duo MAX が不格好な音を立てて差し込まれ、オフラインの表示器に光がともる。最初の継続性記録を開くための媒体は、その後に作られた幾世代もの電子証明より長く生き延びていた。

出てきたのは企業の設立文書ではなかった。EDEN 以前、医師と技術者が、身体は生きていても意思を表せなくなった患者を保全しようとしたときの同意に関する原契約だ。

本来は、本人が話せない間に本人を守るための制度だった。だが一時的な保護者が永久の決定者へと変わっていく過程が記録されている。同意を直ちに得られない緊急保全の条項は世代を経て拡張され、本人の存在を認めるか否かまで管理者が決められるようになった。

エイドリアンが読んだ。

「本人の同意なき保全――本人による事後審査が可能となった場合は、その審査に服する」

企業側が提示した契約書からは、後半の一文が削られていた。

セリンは現代のシステムでは原本を認証できないと異議を申し立てた。エイドリアンは封印と対になる物理媒体を示した。権限を持つ者が一方的に書き換えられないよう、認証の連鎖そのものが意図的にネットワークから隔離されていたのだ。

「あなた方はこの保全契約を、信託の根拠として使っています」とエイドリアン。「原契約の権威を主張しながら、同時に原文だけを否定することはできません」

歴史的な医療条項がどうして水道の配分に関係するのか、と代表者が尋ねる。

「人として認められることを、給水を受ける条件にした瞬間からです」とレイチェルが答えた。

ざわめきが広がった。

ヴォスは表示器に近づき、削除されていた一文を長い間読んだ。

「私に渡されたのは改訂後の契約でした。これは見ていません」

ロイは彼女を見つめる。権限者に騙された無実の技師に仕立てるのは簡単だ。だが NIL-11 の資材を制限し、人々を危険にさらす判断を承認したのは彼女だ。失われた文は起源を説明しても、選択の責任を消しはしない。

「人が登録簿から消されていると知っていたな」

「ええ」

「それでも続けさせた」

「ええ」

「なら、今は何が違う」

ヴォスは人々を見回した。「管理者が法的に消せない、本人の審査権があると証明されたことです」

全端末に警告が走った。

――創設契約に異議。資産保護モードを起動。

06 ― 誰が水を止められるのか

数秒で地区の整備権限が書き換わった。稼働中のポンプ場に立つ技術者の許可が一斉に失効する。診断画面は現場からの命令を受けなくなった。配管は爆発しない。機械が街を襲うこともない。攻撃は行政的で、だからこそ見分けにくかった。

「第六取水所は独立した手動運転に移ったわ」とレイチェルの声が講堂に流れた。「現場の技術者が残ってくれれば九十分は水量を維持できる」

地下からヌルが応じる。「遠隔施錠の命令は切り離した。だが安全警報と回線を共有している。圧力集合管のすべてに人間の監視員が必要だ」

ゴライアスとシェイドが監視員の護衛に向かった。手にしているのは拘束具でも捕獲命令書でもない。工具箱、紙地図、携帯灯だった。ベクターは民間警備の検問を避けられる経路を割り当てた。

セリンは、無許可の技術者が水を汚染する危険があるとして撤退を要求した。レイチェルは化学成分、圧力、細菌検査の実測値を公開ミラー記録へ送った。独立した研究所の志願者が、それぞれの値を逐次確かめた。

ロイは講堂に残った。現場へ走って何かを力任せに破壊したくなる気持ちは理解できた。だが今ここで危険なのは、許可なしに動いた人間を定義上の脅威とみなし、ほかの全員のためだと称して排除する制度だった。

登録を消された人々の一人が壇上に上がった。十四年間、整備の配車業務を担当してきた女性だった。身元が消された後、EDEN は彼女が手配した修理も「無許可の作業」と分類した。その修理の一つが、小児病棟への水供給を守っていた。

「私の仕事で子どもたちは助かったんです」と女性は震える声で言った。「それなのに、私は一度も働いていないと言われた。どちらを信じればいいんですか」

企業側からは誰も答えなかった。

ヴォスは中央席で手動の上書き命令を入力した。画面は拒絶を返した。

「アクセス拒否」と彼女は静かに読んだ。

セリンが彼女を見る。「理事会が緊急制御権を引き継ぎました」

「患者が接続されている間は決してそんなことをしないと言ったはずです」

「保証した覚えはありません」

ロイがヴォスの隣に立つ。「どういう気分か、分かったか」

彼女は彼を見なかった。「分かっていたわ。危険を管理の内側に閉じ込められると思っていた」

照明が暗くなった。公開配信の画面では、第六取水所の圧力が下がり始めていた。

07 — 七十パーセントの限界

ロイが貨物用の縦坑を通って取水ギャラリーへ着いたとき、圧力差が危険域に達するまであと二分だった。調整弁そのものは故障していない。自動作動器が、所有権者からの遠隔命令に従って弁を安全位置とは逆側に押しとどめていた。

直接殴れば作動器は折れる。しかし密閉部も破れ、水が制御不能になる。ロイは必要な力を計算し、かつて持っていた出力への誘惑を感じた。NIL-11R が発揮できるのは旧式の最大七十パーセントまで。そして、損なわれた本来の寿命を一分たりとも取り戻すことはできない。

「壊さないで」とレイチェルが通信で言った。「そのあとも弁を使うのよ」

「みんな俺への要求が厳しいな」

パネルの下では、摩耗した手動の連結部が水圧の脈動に合わせて振動していた。角度が悪い。技師二人が外そうとして失敗した場所だ。ロイは鋼鉄のくさび、短いケーブル、固定ピンを持ってくるよう頼んだ。

「てこの原理でこじ開けるのか？」と技師が聞く。

「違う。水に手伝ってもらう」

くさびを作動器の外装に当てる。水圧の周期が一瞬だけ継ぎ目への負荷を小さくする、その時を待った。最も軽くなった瞬間にケーブルを張り、連結部を数度回し、固定ピンを差し込む。何も砕けなかった。弁は手動の中立位置へ戻った。

――身体出力、二十九パーセント。

レイチェルが迂回路を開いた。水が復旧した集合管を流れはじめる。酸素と圧力と、また明日が来るという目に見えない約束を運んで。技術者たちは歓声を上げた。もう失敗を覚悟していた人々の、疲れきった驚きだった。

講堂の画面には回復した圧力曲線が、企業側の予測と並んで現れた。グラフ自体は道徳を語らない。ただ、緊急接収を正当化するはずの破局が起きなかったと示していた。

ロイは壁に寄りかかり、蓄電系が回復するのを待った。ポンプの音に耳を澄ます。ごく普通のリズムが、今はかけがえのないものだった。

通信でベクターが言った。「信託は、運転には自分たちしか必要ないという最強の証拠を失った」

「次は何と言う？」

「市民には大規模な調整ができない、と」

ロイは誰の目にも分かる道具で装置を保っている技術者たちを見た。

「なら、市民に証明する機会を与えよう」

08 — 支配を拒む

緊急仲裁は企業連合の同意なしに再開された。生中継はほかの都市にも広がり、見覚えのある仕組みを人々が指摘し始める。説明のない不足、期限切れの権限、審問もなく停止された身元、自然法則のように扱われる商業条項。

自治体の水道局が実測値の公開を申し出た。病院は相互支援の備蓄を提案した。技術者は、ひとりの管理者が市民の身元と生命維持インフラへのアクセスを同時に奪えない分散運用を説明する。それは完璧な計画ではなかった。故障も争いも想定されていた。だが、数字の中に人がいた。

セリンが最後の提案をした。NEXUSYS-11 を暫定管理者に据えてはどうか。彼の身体能力、特異な来歴、EDEN の強制規則への抵抗こそ、制度を修復するまで管理権を引き受ける資格だという。

講堂が静まり返った。

ロイは罠を理解した。受ければ、企業連合は不当な権力移譲だと言い、次の失敗をすべて「許可なき人工生命の支配」に帰して世論が戻るのを待つ。断れば、無責任だと呼ぶ。

離れた壇上でヴォスが見ていた。表情から彼女の望みは読めない。

「やらない」とロイは言った。

セリンは両手を広げる。「なら、誰にも行動する権限がないと認めるのですね」

「違う。みんなの選択を俺が決める権利はないと認めるんだ」

「単一の権威なしで、対立をどう裁くのですか」

「証拠で。交代させられる代表で。質問できる技術者で。黙って書き換えられない記録で。そしてシステムが消そうとする人のための異議申立てで」

「それでは時間がかかりすぎる」

「なら、あとから審査できる緊急手続きを作れ」

評議会は暫定の公開監査憲章を採決した。それは資源不足に勝利したとは宣言しなかった。独立した測定、未登録住民への緊急アクセス、企業契約の公開審査、権限を乱用した者の責任追及を命じた。

ヴォスも賛成票を投じた。

ロイがそばを通ると、彼女は言った。「あなたは、もっと遅いシステムを作ったのね」

「そうかもしれない」

「失敗すれば、人々はあなたを責める」

「なら、責められた人間が答えられるようにすればいい」

しばらく黙っていたヴォスが、小さな金属製の筒を渡した。中には、欠けた円形認証印のもう半分が収められていた。

「あなたは最初の例外を探していた。私は、その第二の鍵しか見たことがない」

ロイは金属片を回す。内側には、近接視覚でしか読み取れないほど細い文字が刻まれていた。

――保護者は所有者ではない。

講堂のはるか下方、どの当事者にも属さない記録庫で、十一年間眠っていた表示灯がともった。

創設契約に、独立した二人の物理的証人が揃った。

そして所有権をめぐる争いは、ついに同意を問う争いへ変わった。

――第九章・終。